

# 中学校における進路指導の課題と指導・援助の必要性

協和中学校 春山 集

## 1. はじめに

中学校教育の重要な課題は、1人ひとりの生徒に将来の進路において自己の能力・適性等を十分発揮し職業生活を通して望ましい自己実現が図れるようにすることである。

しかし、社会における価値観・教育観・進路観等が多様化され、生徒は自己の進路観（進学意識、就職意識）を確立することが容易でなくなっているが、上級学校への進学率が94%（本市95%）を越えた現在、将来への目的意識をもたないで就職・進学を希望したり、特に、進学した者の中には、入学後の学業生活に不応を起こしたりする生徒が年々増加するなど、進路指導に多くの問題を生じている。

中学校学習指導要領の総則には、「学校の教育活動全体を通じて、個々の生徒の能力・適性等の的確な把握に努め、その伸長を図るように指導するとともに、計画的、組織的に進路指導を行うようにすること。」と示されている。

したがって、進路の指導は、学級指導だけで行われるものでなく、教師が指導・援助するという方針のもとに、学校の全教職員が一致協力して行われるべきものである。

## 2. 進路指導の課題

中学校の学習指導要領が告示されて以来すでに8年目を迎えた現在、特に、進路指導においては今だに充実しているとは考えられない面が山積している。その主な課題として、

- 学校における進路指導に関する組織体制の整備
- 進路指導に対する諸計画の作成
- 進路指導に対する教師の共通理解の深化
- 進路指導に関する情報資料の収集・整備・活用
- 進路相談等による個別指導の徹底
- 生徒の家庭や関係諸機関との連携など

これらのうち急務と考えられるものをいくつか取りあげることにはしたい。

### (1) 学級における進路指導の充実をはかることである。

進路指導は、「学校の教育活動全体を通じて……中略……行われるもの」であるが、それらの整理・統合・深化をはかる場合は特別活動の「学級指導」である。

学級指導の内容には、生活への適応、悩みや不安の解消、個性の理解、学習態度の形成、進路適性の吟味、進路の明確化、適切な進路選択の方法などが示されていて、しかもこれらが、各学年の発達段階に応じて適切に指導されなければならないとされている。

実状はどうであろうか。過日、市内中学校10校の進路指導主事を対象に次のようなアンケートを取って見たので関係あるもののみを紹介してみよう。

- ① あなたの学校の学級担任は、学級指導の時間を有効に生かしているとお思いですか。  
「生かされていると思う」と答えた学校が6校、「やや生かしていると思う」と答えた学校が3校、「わからない」と答えた学校が1校。
- ② あなたの学校では、学級指導や道徳の時間を学校行事やその他でカットされることがありますか。「ある」と答えた学校が1校、「ややある」と答えた学校が6校、「ない」と答えた学校が3校であった。

この調査結果から考えられることは、自校を含めて言えることは、①については、半数近い学校は、学級指導の時間を他の活動に使われているようであり、②については、ほとんどの学校で、計画されている学級指導の時間を学級担任サイドで学級内の他の活動に使われていることになる。これでは、学級における進路指導の充実には、はかれないと思うのである。

本来、教科・道徳・特別活動は同等に取り扱うことになっているはずである。ややもすれば、教科以外の道徳・特別活動（学級指導）については、教師自身が苦手意識をもっているのではないかと考えてならない。

## (2) 1人ひとりを生かす指導の徹底をはかることである。

学校教育は「個々の生徒の人間形成を目指して行われるもの」である。特に、進路指導は「個に始まって個に終わる」とさえ言われるように、個々の生徒のもつ個人的特性を重視し、その資質・可能性・行動・態度などの個性的な発達を助長する教育活動であり、将来の職業生活における人間としての生き方や自己実現などについて望ましい進路設計や意志決定の能力・態度の育成を目指す教育活動であると言われている。

進路指導においては、この個別指導すなわち1人ひとりの生徒を生かす指導について、次のようなことが考えられ、実践されるべきものととらえている。

- ① 個々の生徒の発達段階に応じて、その生徒の進路に関する発達課題を自主的に達成できるように援助する。
- ② 生徒が中学校に入学した当初から、校内の教職員の共通理解の基盤にたって、各学年にわたって、計画的・組織的・継続的に個別指導を行う。
- ③ 生徒の望ましい進路の選択決定や将来の生活へのよりよい適応などについて自主的・自発的に学習できるようにする。
- ④ 生徒が、自己実現に向けて、自己理解、自己探索、自己決定、自己評価など、自己学習ができるように援助する。
- ⑤ 学校における個別指導がより徹底するために、生徒の家庭や関係諸機関等との連携・協力をじゅうぶんはかるようにする。

このような個別指導が徹底されることによって、指摘されるようないわゆる偏差値による振り分けや輪切りによる進路先の選択決定でない、個々の生徒の能力・適性、進路希望に応

じた適切なものとなっている例は少なくない。

〔本県では、真岡市立大内中学校（昭和55～56年）・矢板市立矢板中学校（昭和57～58年）などが、県教委指定実験学校として個別指導にかかわる研究発表をしている。〕

(3) 進路に関する情報資料の整備と活用をはかることである。

進路指導においては、その学習や将来の進路先の選択決定・進路先におけるよりよい適応等のために、進路情報資料を特に重視している。情報化社会と呼ばれる現代の社会においても、必ずしも個々の生徒が必要とする情報資料が各学校に整備され、活用できるようになっているとは限らない。

進路指導では、指導上必要な情報資料を整理して次のようにまとめている。

① 進路への関心を高める情報資料

中学生の場合、一般に自分の将来の進路や自分の将来の職業に対する関心の度合いが低学年にしたがってあまり高くないことがさまざまな研究報告からもうかがえる。したがって、個々の生徒に、将来の進路への関心を高めるとともに、自己の進路に対する課題を切実な問題としてとらえさせ、その解決に向けて努力するように指導する必要がある。

本校では、特に、2・3年生について学期1回を原則として次のような様式のアンケートを取っているものの、「わからない」「今のところ考えていない」と且答する生徒がい

第 回	進 路 希 望 調 査	昭 和 年 月 日
		( ) 年 ( ) 組 ( ) 番
		氏 名 _____
1 将来何になりたいですか。		
2 それはどんな理由からですか。		
3 なるためにはどうすればよいと思いますか。		
4 現在の希望を書いて下さい。		
○ 国立工業高等専門学校 (地域名) ( ) _____ 科		
○ 公立高校 ( ) 高等学校 _____ 科		
○ 私立高校 ( ) 高等学校 _____ 科		
○ 各種学校 ( ) 学校・学院 _____ 科		
○ 産業技術学校(職業訓練校)(地域名)( ) _____ 科		
○ 事業所内職業訓練施設(校)(地域名)( ) _____ 科		
○ 定時制高校		
○ 就 職 (職種名)( ) (方面= )		
5 そ の 他 ( )		

たり、'高等学校への進学理由も「みんなが行くから」「高校ぐらいは」と回答するような生徒がみられる。このことからして特に重視しなければならない。

#### ② 産業・職業に関する情報資料

将来の生活設計を立て、具体的に職業を選択決定する場合には、その職業の特性や将来性などを正しく理解するとともに、その職業が、成り立つ産業の動向等についても十分理解しておく必要がある。

職業を選ぶ際、その性格・職務の内容、作業条件等についての正しい理解がないまま決定すると、いわゆる離職・転職の原因となる。本市においても、昨年度（57年度）卒業生のうち約5%の者が就職しているが、そのうち約70%の者が離職・転職をしているようである。

また、新しい産業技術が開発され、企業化されると、職業やその職務の内容にも大きな変化が生じてくる場合が少なくない。更に、わが国の経済の国際化に伴うさまざまな変化も見られるので、職業に対する理解を深めさせる場合には、職業の諸条件とともに、産業・経済の動きについて十分理解を持たせる必要がある。

#### ③ 上級学校等に関する情報資料

文部省の調査によれば、昭和58年3月の中学校卒業生は、総数が185万人で、そのうち高等学校や高等専門学校への進学者が174万人、専修学校の高等課程や職業訓練校等の教育訓練機関等の入学者が4万6千人、就職者が5万2千人という状況であった。

このように上級学校等に進む生徒の場合には、上級学校等で受ける教育や訓練の意義を十分理解させることが大切である。「みんなが行くから」「高校ぐらいは」という考えでは、不適応を起し、中途退学することも当然と言える。

本県の公立高等学校を途中で退学した生徒が57年度は1,666人に達したことが、県教委と県文芸学事課の調査によって発表されている。その主な理由としては、退学者の半数以上は「勉強する気がない」「授業がわからない」「ほかの高校に行きたかった」「就職したかった」という不本意入学組だった。

#### ④ 進路先の選択決定に関する情報資料

中学生にとって、卒業時の進路決定することは初めての経験である。しかも、進路先の選択決定は、生徒の一生の生き方を左右することもあるので、この指導・援助について特に慎重を期する必要がある。そのためには、学校において正確で新鮮で豊富な情報資料を整備し、その活用を図るよう心掛ける必要がある。

特に、就職者については、本人の能力・適性・性格・興味・関心・家庭環境等からみてその事業所に合っているかどうかをよく調査・検討した上で選択決定させることが大切である。最近では、雇用者側からの求人も少なくなっているため教師側においても十分調査・

検討するよう付け加えておきたい。

⑤ 新しい環境への適応と自己実現に関する情報資料

中学校を卒業した生徒が、進学後あるいは就職後に迎える新しい環境において、より望ましい適応ができるような指導・援助は、選択決定に次いで大切なこととされている。更に、新しい環境の中で自己実現を達成できるような指導も大切なことである。ただ上級学校等へ送り込みさえすればよいというのは、真の教育、進路指導とは言えないことを肝に銘じておきたいものである。

(4) 進路相談の活発化をはかることである。

進路相談は、「生徒が進路の計画や選択がよりよくできるように、通常は個別相談により、時にはグループ相談などによって、個々の生徒の自己理解や、進路の世界の理解を深めさせ、生徒の進路の選択や計画、さらに将来の生活における自己実現がより確実に達成できるように、その可能性を高めたいとする援助活動である。」と昭和49年「中学校・高等学校進路指導の手引 — 中学校学級担任編」（文部省）に定義として与えられている。

この定義を要約すると、個人的面接とともにグループ相談を強調し、また最終的な進路選択への援助というよりは、将来のための進路への関心を高め、進路の計画をたてさせ、進路選択の能力を伸長させる、いわば自己実現への自己指導能力の発達を伸長させることがとくに強調されているのである。

そこで、まず、早急に手がけなければならない進路相談は、生徒個々にもつ不安や悩みを解決することである。

文部省の調査によれば、中学校3年生で現在何らかの不安や悩みをもつものは全体としては59%あり、男子では53%、女子では63%ある。また「少しある」と答えたのは全体として36%で、男子37%、女子34%となり、約95%の生徒がなんらかの不安や悩みをもっている。悩みの内容では「授業や勉強について」（67%）が第1位で、次いで「将来の進路について」（65%）が高い。この両者が圧倒的に他を引きはなしているが、その次に「友人関係について」（12%）第4位「性格について」（11%）となっている。

このことから考えられるように中学3年生は進路選択決定を迫られているため、それを何とか解決したいと思うあらわれである。

この不安や悩みの解決の仕方としては、中学3年生は「だいたい自分で解決する」（52%）がもっとも多く、次いで「おもに友だちに相談して解決する」（22%）が多く、第3位に「おもに親や兄弟など家の人に相談して解決する」（13%）となっている。このほかに「どんなことでも自分で解決する」ものが男子12%、女子5%、平均して8%いることは注目される。また、「先生に相談して解決する」のがわずか2%であることは、中学校に

において生徒の相談欲求を十分に満足させていない現状がうかがわれ、この面からも相談活動の活発化が要求されるのである。

このように中学校においては、生徒たちが現実によく多くの悩みをもっており、そのうちでも「進路」に関する悩みがもっとも多いことは、進路相談の潜在的要求の強さを示すものといえる。しかし、現在の学校生活においては、先生たちとの接触が授業という集団場面に限られ、個人的に親身になって相談できにくい状態であることも上記の調査が明らかにしている。このような生徒の要求にかなうように、現在の進路相談をいっそう計画的に充実させ、活発化させる必要がある。

### 3 おわりに

就職者の離職・転職、上級学校進学者の中途退学増加を考えると、中学校における進路指導は、重大な時期にきていると考えなければならない。そのためにも、われわれ教師自身が、進路指導に対する理解と熱意をもち、1人ひとりの生徒に将来の希望をもたせ、よりよい学校生活を送れるように指導・援助しなければならないと思うのである。

#### 〔参考文献〕

- |                     |        |
|---------------------|--------|
| 中学校学習指導要領           | 文 部 省  |
| 中等教育資料 №468         | 文 部 省  |
| 進路相談のすすめ方（実践進路指導選書） | 実務教育出版 |